

共同研究を終えて

安室 知

日本常民文化研究所は、1921年にアチックミュージアムソサエティとして渋沢敬三により創設された。その後、太平洋戦争中に日本常民文化研究所へと名称を変え、戦後には財団法人化された後、1982年には神奈川大学に招致され付置研究所となっている。創立年からすると、歴史としては神奈川大学よりも古く、一足早く2021年には創設100周年を迎えることになる。

創設以来、研究所の活動は民具や古文書の収集・整理、海域・海村の歴史民俗研究など、たえず日本の常民文化を研究対象としてきた。人的にも予算的にも、けっして大きな研究機関とはいえなが、上記の研究課題においては、日本において中心的な研究機関として機能してきたという自負はある。そして現在においては、創設以来の研究課題に加え、さらにそれを発展させるかたちで、日本常民文化研究所は自らの研究体制を大きく変えていっている。

2008年には、文部科学省21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003—2008)の研究成果を継承・発展させる組織として、非文字資料研究センターを発足させ、それを日本常民文化研究所に付置している。これにより研究の視野は日本にとどまらず世界へと開かれた。

また、2009年には、日本常民文化研究所を母体にして国際常民文化研究機構を組織し、文部科学省「平成21年度人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」によって共同研究拠点として認定され現在に至っている。

このように、神奈川大学に移設後の日本常民文化研究所の活動は記憶に新しく、また「年報」等により記録化が進んでいるが、機関としては変転が繰り返されたためアチックミュージアムソサエティ当時の活動やそれを支えた同人たちの動向については必ずしも明らかにされないまま時の流れに埋もれようとしている。それに加え、創立から100年を迎えようとしている現在、記録化をしようにもアチック当時の関係者への聞き取りは難しくなり、かつ関係資料も国立民族学博物館や流通経済大学、渋沢史料館など各地に分散しているためその所在情報さえあやふやになりつつある。

そのような状況の中で、国際常民文化研究機構による公募共同研究として、アチック・ミュージアム時代の歴史について何らかの研究課題を設定してもらえようような研究者を探しつつ、共同研究への応募者として声かけをしたのが、本共同研究の代表で、アチック・ミュージアム史についてすでにいくつかの研究成果を有していた加藤幸治氏(東北学院大学)であった。声かけに至ったのは偶然が大きく、たしか神奈川大学で日本民俗学会の研究会が開催されたときにたまたまお会いしたのがきっかけであったと記憶している。何はともあれ、それをきっかけに、「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」という課題を設定し、かつそれに対応した研究メンバーの組織化をはかっていただいた。結果、応募課題は国際常民文化研究機構の共同研究として採択された。

実際の研究活動としては、研究代表者のリーダーシップのもと、アチック・ミュージアム由来の資料を有する関連機関等を会場に共同研究会が定期的で開催され、かつ研究メンバーそれぞれによる個人調査が活発におこなわれた。特筆すべきは共同研究メンバーがただの一人も欠けることなく最後までそれぞれに設定した研究を遂行したことである。これまで日本常民文化研究所や国立歴史民俗博物館、人間文化研究機構などにおいて、いくつもの共同研究に関わってきた経験からいえば、それは希有なことであるといつてよい。

そうした本共同研究の成果の一部は、本報告書の刊行に先立ち、共同研究フォーラムという形で

公表している。国際常民文化研究機構第4回共同研究フォーラム「再考 アチック・ミュージアムの水産史研究 — “ハーモニアス・デヴェロップメント” の実像—」がそれで、2018年7月7日(土)に神奈川大学において開催された。本フォーラムは、共同研究の成果を、研究者コミュニティだけでなく、多くの人に共有してもらうべく公開講座として企画されたものである。

本フォーラムにおけるそれぞれの発表テーマは以下の通りである(発表順)。「渋沢水産史研究室による水産史研究の歴史的背景について」(宮瀧交二)、「戦前の地方農村青年をとりまく思想的・社会的状況について」(今井雅之)、「未完の筌研究にみる渋沢水産史研究室の調査法」(加藤幸治)、「渋沢敬三と魚名研究 — その特徴と学史的意義—」(安室知)、「桜田勝徳の志賀島採集のハコフグの剥製について」(増崎勝敏)、「宮本常一による昭和10年代民俗調査の足跡」(佐藤智敬)、「山口和雄の網漁業研究にみるアチック・ミュージアム時代の水産史研究の位置づけ」(磯本宏紀)、「祝宮静の豆州内浦漁民史料調査にみる水産史研究の展開」(葉山茂)、「楫西光速の塩業研究にみる渋沢水産史研究室の経済史学的一面」(星洋和)、「戸谷敏之の問題関心にみる魚肥研究の位置づけ」(今井雅之)、「伊豆川浅吉の捕鯨研究と鯨肉食通信調査」(佐藤麻南)

そして、このフォーラムを受け、このたび編集されたのが本書である。本書は共同研究の成果が今後長く研究資源として利用されるよう、共同研究メンバーによる個々の論考に加え、これまで公にされることなく研究機関等に眠っていたいくつかの未発表資料を掲載している。

さらにいえば、本書はあと一年に迫った日本常民文化研究所の百周年にとっても重要な記録となる。百周年記念誌が企画される時、基礎的な資料となるにちがいない。そう考えると、本来なら、本共同研究のテーマは日本常民文化研究所本体がやらなくてはならないことであったかもしれないが、むしろ外部の目でなされたからこそいくつもの新たな発見がなされたといえてよい。

最後になるが、本共同研究の代表者である加藤幸治氏、研究メンバー(共同研究者・研究協力者)となる磯本宏紀(徳島県立博物館)、今井雅之(東北歴史博物館)、揖善継(和歌山県立自然博物館)、佐藤智敬(府中市郷土の森博物館)、葉山茂(国立歴史民俗博物館)、日高真吾(国立民族学博物館)、星洋和(宮城県公文書館)、増崎勝敏(大阪府立港高等学校)、宮瀧交二(大東文化大学)、佐藤麻南(東北学院大学、大学院生)の各氏には、本務に多忙のなか本共同研究のために調査をおこない論考を執筆いただいたことに、日本常民文化研究所として感謝申し上げなくてはならない。